

# 異世代・非血縁間シェア居住の可能性

—アメリカの事例を通して—

56119 宮原 真美子

## 1. 研究の背景と目的、位置づけ

### 1-1. 研究の背景

近年家族形態は大きく変化してきている。2000年には単身世帯は1291万世帯で全体の27.6%を占め、また、「日本の世帯数将来推計」(国立社会保障人口問題研究所)によると2025年には単身世帯が1716万世帯となり全世帯数の34.6%を占め2000年に最大家族類型であった「夫婦と子供から成る世帯」を抜いて最大家族類型になると予測されている。しかしながら現在の住宅政策が核家族を中心としていて、これからも増加し続けると推測される単身者の視点での住宅供給の試みは行なわれていない。

特に高齢者問題においては、日本は2010年には超高齢社会に突入する見込みであり、中でも高齢者の単独世帯数は2020年には夫婦のみの世帯数を逆転し34.4%に達する見込みであり高齢期を1人で暮らす姿はより一般的なものになると考えられている。自身を健康と考えている高齢単身者も、実際は体力・精神面での不安から、施設に入らざるを得ない傾向がある。この様な高齢者に対して自宅で自立しながら生活する、その上で必要とするサポートを持てる住まい方が、今後さらに普及していくことが重要であると考えられている。

### 1-2. 本研究の目的

本研究では、単身者を、自らの意思で単身者を選択した「選択的単身者」と、子供の独立、配偶者との離別など自身を取り巻く環境の変化により一人暮らしを余儀なくされた「結果的単身者」に分類し、それぞれの非血縁関係による生活をシェア居住という点から分析し、中でもこれから確実に増加すると見られる1人暮らし高齢者の生活の多様性の可能性をアメリカで行なわれている在宅での異世代間シェア居住から探り、その方向性を示唆することを旨とする。

### 1-3. シェア居住の定義と分類

ここでは「シェア居住」とは非血縁関係の人間同士が1つの住居を共有し生活することと定義する。

多くのスタイルを持つシェア居住のうち、選択的単身者同士が複数人で一つの住居を賃貸し

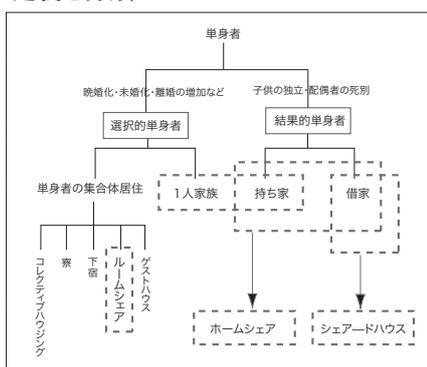


図1 単身者の種類と住宅所有形態によるシェア居住分類  
行なうものを「ルームシェア」また、住宅を所有する結果的単身者と、選択的/結果的単身者間で行なうものを「ホームシェア」、結果的単身者のうち住宅を所有しないもの同士が第三者の管理する住宅で行なうものを「シェアードハウス」と分類定義した(図1)。

## 2. 研究の方法

本文は以下の2つの部分で構成される。

### 1) アンケート調査によるシェア居住者の生活実態把握

### 2) ヒアリング、実測調査による住宅の歴史、使われ方の変遷と生活実態把握

#### 2-1. 調査の方法

「ホームシェア」の調査は、カルフォルニア州サンマテオ郡にあるHIP HOUSINGのクライアントを、また「ルームシェア」の調査はUC Berkleyの学生、またサンマテオ郡周辺のワーカーを対象とし、アンケート調査を行なった。アンケート上で調査依頼を行ない承諾を得たシェア居住者を対象にヒアリング及び実測調査を行なった。

#### 2-2.HIP HOUSINGの概要

HIP HOUSINGは1972年に設立の非営利団体である。賃料が高騰しているアメリカサンマテオ郡で可能な住宅供給を目的に、ホームシェアを1979年にスタートした。

この地域では70%以上の65歳以上の高齢者は持ち家に住んでいる。そのうち3/5の人は一つの住宅の中に5部屋以上を有し、一人で暮らしていると言われている。住宅の価値は上がっているのに、自身の住宅の価値に気付かない、価値のある住宅を持ちながらうまく活用できない高齢者と、収入の少ない若者を結びつける役割をHIP HOUSINGは担っている。また、異世代間のホームシェアは高齢者の在宅、長年住んでいた環境での生活継続を可能とし、安全面、交流、そして自立の手助けとなる。若者には、住居費が節約でき家庭的雰囲気的生活を可能とし、今後の生活を築く準備も可能とする。

表1 調査概要 表2 アンケート項目

アンケート調査概要		(1) 基本属性
実施期間	2007.07-08	性別・年齢・職業・シェア経験の有・契約年数
実施方法	H: アンケート郵送 R: アンケート配布	(2) これまでの居住歴
調査対象数	H:122 R:134	(3) 現在のシェア居住について ・ コモンスペースにある私物とそれらのシェアについて ・ コモンスペースの管理方法について ・ シェアを始める際の改装・増築・追加物について (Providerのみ) ・ 家具の備え付けの有無と持ち込んだ家具について ・ シェアに至った理由・不安の有無、現在のストレス、問題点について ・ コモンスペース・プライベート・プライベートスペースの満足度
有効回答数	H:20 R:45	(4) シェア居住者の生活について ・ 行為の場所について (シェアメイトがいる時といない時での変化等) ・ プライベート/コモンスペースでの平均滞在時間 ・ サイズの満足度/行為の内容
ヒアリング・実測調査概要		(5) 居住者間の人間関係について
住居形態	H・S R・S	・ 交流の有無と内容 ・ 食事の共有の有無とその頻度
戸建てタイプ	7 1	(6) 来客者と居住者との関わり ・ 来客者の有無とその頻度
コンドタイプ	2 0	
アパートタイプ	1 7	
面積の平均 (m <sup>2</sup> )	H・S R・S	
住戸	117.7 77.2	
コモン空間	63.29 43.2	
プライベート空間	52.38 33.8	

## 3. アンケート調査によるシェア居住者の生活実態分析

### 3-1. シェア居住について

アンケートを実地したシェア居住者のうち、ルームシェア居住者の年齢は10代、20代が95%を占めた。それに対してホームシェア居住者のうちProvider(ホームシェアの住宅の貸し手)の年齢は40代から90代、Sharer(借り手)の年齢は20代から60代と関わる年齢層は幅広い(図2)。

ホームシェア、ルームシェア居住者ともにシェア居住に至った最大の理由はコスト削減、貯蓄のためなど「経済的」なものである(図3)。しかし、シェア居住のメリットとしては、誰かがいる安心感、人との交流、安全面など「心的」な要因を挙げる居住者が多い(図4)。

ルームシェア居住者の挙げるシェア居住の好きな点は、常に話せる人、手伝ってくれる人、家族のような存在、一人ではない等「交流面」について多くの回答があった。ホームシェアにおいては、ルームシェアと同様に「交流面」に対して、また、夜間家に誰か居るなど「安心感」「セキュ



<p><b>事例1：1-a 家主女 75 歳 /1-b 女性 20代 短大生 /1-c 女性 40代 ワーカー・学生</b></p> <p>1-a は 1984 年に当時野球の審判をしていた近くの短大の野球チームの留学生 2 人を彼女の家に迎えたのが、非血縁関係での生活の始まりとなる。2 人の野球留学の学生は息子達と部屋をシェアしていた。この経験があったことから、子供の独立後近くの短大の学生に部屋を貸していた。数年前に旦那様をなくす。それを機にホームシェアを始める。シェアは地域に対して人の賑わいを示す手段でもあるという。1-c は今までおつきあいをしていた方と別れ家を早急に出なければならなかったこと、新しい仕事に就き、同時に短大に通うため、安い住居費と学校から近いこの家でのシェアを決めた。3 居住者間で食事と一緒にすることはなく、主な交流は挨拶と、短い会話である。しかし、ホームシェアの好きな点として 3 居住者とも、交流・安全・孤独ではないな点を挙げています。</p>	<p><b>事例2：2-a 女性 (家主) 97 歳 /2-b 女性 55 歳 レストランパート</b></p> <p>2-a は 91 歳の時に家の中で転倒してしまっただけで不安を覚えホームシェアを始める。また、車椅子を使い始めてからは平日 10 時～14 時まで部屋の掃除と夕食の準備の為にヘルパーを雇っている。シェアメイトからの副収入がそれを可能としている。彼女の見守りの中、買い物、入浴、トイレを行なっている。息間はヘルパーが、また 5 時半以降はシェアメイト 2-b が家にいる。また、2-b が夜外泊する際はお手伝いの方が、娘に泊まってもらう。シェアメイトが夜間家にいるという安心感は、何か行為を一緒にするわけではないが、ヘルパーや娘がいるのと同じだけ効果を持っていると考えられる。ホームシェアは自宅で自立しながら生活するひとつの手段となっている。</p>
<p><b>事例3：3-a 女性 (家主) 55 歳 3-b 女性 23 歳 フルタイム / 学生</b></p> <p>1 年前病気であった母の為にバスルームと部屋を庭に増築。その際収納倉庫も増築。将来は近くに住む兄弟など、家族が住む可能性、また他人に貸す可能性を考えて、母屋のドアによって、完全に独立したものとしても使えるように計画した。また、シェアを始めてから 1-a はかつてセントラルヒーティングであったがそれを別にした。3-b は以前ルームシェアで盗難の経験があるため、キッチンはないが独立したこの居室好んでいる。ヒアリング中に「Provider は今いますか？」と Sharer に聞くと、「普段この時間には家に帰宅しているはずだけど」と返答があった。居室は完全に分離されているが、お互いの日常のルーティーンは把握していることが分かる。Provider は料理が好きで、多く作った時は、電話をかけ Sharer におすそ分けをしたりもする。その際は中庭を通って行き来する。また電話の声や、ゲームをする音など扉を通して聞こえる時もある。家族と住んだ住宅、母親の介護をした住宅で、扉 1 枚ロックするだけで、シェアメイトとの空間のつながりをつなぐことが出来る。2 つの居室は完全に分離しているが、相手の生活をぼんやりと感じながら生活している。</p>	<p><b>事例4：4-a 女性 (家主) 69 歳 / 4-b 女性 25 歳 学生 (筆者自身)</b></p> <p>子供 3 人が家を出て、かつての旦那と離婚をした。その際 4-a は離婚の財産分与でこの家を手に残した。まだローンも残っていた。4-a はホテル業界で働き収入もある程度あったのだが、それまで夫と 4-a 二人分あった収入が半減したことに精神的余裕をなくす。ホームシェアを決意した理由は住宅ローンの返済のため副収入が必要であったこと、また、自分の家に誰かが居るという安心感を求めてであった。今現在はローンの返済も終わり、リタイアした後に安定した収入が得られるパートの仕事があること、また 1 人で生活することに慣れたため、今はホームシェアの必要を感じていない。しかし今後歳を取り仕事が無くなったならばまたシェアメイトを持つ可能性があること、また、自分の体面との兼ね合いであるが、家賃よりサービス交換を行なう可能性も考えられるとのことであった。また更に体面面で介護が必要となったら、介護のプロと住む事、もしくは、シェアメイトからの収入を使って介護をしてくれる人を雇うという選択肢ももちろんあるとの話だった。ホームシェアをしていた当時、副収入を屋根の防水の張り替えや、庭の手入れなど、住宅の手入れに使用していた。</p>
<p><b>事例6：6-a 女性 (家主) 62 歳 6-b 男性 60 歳 6-c 女性 26 歳</b></p> <p>3 人とも生活の時間帯が違うので、特に common 空間の使用時間の問題は起こらない。6-c はとてもリラックスした不平を言わないタイプの人間であるためソーシャルな良好な人間関係を築いている。ここ最近では 6-a は腰が悪く家事をこなす事が苦痛になってきた。そのことを 3 人で話し合いゴミ出しバスルームの清掃を 6-c が担当し、共用部の掃除機かけを 6-b が担当する役割分担を行なった。話し合いを設けるまでは 6-a は自身がやらなければならないというストレスがあったが、話し合いを持ち、自分の不満を伝えることで以前よりもうまくシェア出来るようになった。6-b, 6-c はそれぞれ個室に鍵を持つが長期家をあける時は鍵は使われていない。6-c は、昔離婚してからずっとホームシェアをしている。ここは 2012 年 2 月で 3 年目を迎える。以前自身の家族と住んでいたこともあり、1 人暮らしの暗い家に帰るような気がしないというのを、ホームシェアを続ける大きな理由として挙げている。また、生活の細かいこと、例えばゴミ出し、バスルームの掃除、洗剤など日常生活用品の買い出しなどまでは出来ず、ホームシェアをすることでそういう面を助けてもらっている。また、6-a の家族が遊びにくると一緒に話したりもする。</p>	<p><b>シングルマザー's シェアードハウス事例：3Adults 5kids</b></p> <p>社会人学生のシングルマザー支援の 2 年間の期間付きシェアプログラムである。プログラムの関係し入居時期にずれがあり、3 家族が一緒に住むと 1 家族は孤立してしまうことも。メリットは子供が一緒に遊べる点で、同時にその時間は母親間で生活のルールや不安などを話すことの出来る時間となる。また、一人で子供を育てなければならない不安と孤独感を他のシングルマザーと共有出来る点も評価されていた。過去に一度夕食のシェアをトライしたが、食習慣の違いのためうまく行かなかった。食事の共有は安く済むし、時間も手間も省けるメリットがあったが、ストレスの方が大きくなり辞めた。問題・不満点として、まず、子供の数が増えるので必然的にうるさくなる。注意したくとも、他人のしつけには口は出せないし、自分の子供も叫ぶため強く文句は言えない。うるさい時は音楽やテレビの音で防いだりしているという話だった。また、common 空間に対する不満として、キッチンには冷蔵庫が 2 つ、流しは 3 家族分ある。それぞれの場所を決めているが、共用のオープンや食器洗浄機などがばらばらにあり、動線が重なるのが面倒な点と指摘していた。子供がいるため、他事例よりキッチンの使用頻度は多い。また、子供の時間に合わせると、どうしても使用時間も重なってしまうために起こる問題である。また、人それぞれきれいという感覚の差が問題となってくる。毎月話し合っ、週ごとに掃除担当を決めるが、母親達は社会人・学生・母親であり、非常に忙しく、忘れてしまったりする。</p>

図 6 ホームシェア・シングルマザーシェアードハウス事例

ではなく、ホームシェアとして活用していることが分かった。またこれらの増改築が、シェア居住をする際に居室・設備数の充実に繋がっている。

### 4-3. シェア居住が生む心的効果

ヒアリング調査でも、ルーム・ホームシェアともに、多くの居住者は安心やセキュリティーなどの心的効果进行评估していることが分かった。ルームシェアでは誰かがいることが、一緒に食事をしたり、TVを見たり行為を共有する「交流」に繋がり、その交流を通して、家族といるような安心や、楽しさを感じている。一方、ホームシェアでは、図6の事例3のように、空間の共有はしていないが、お互いの生活や気配を感じていたり、事例6のように明かりのついていない家へ帰宅出来ることに安心感を心得ている。また事例2では行為の共有は見られないが、夜間、ヘルパーや娘がいてくれる代わりにシェアメイトがいる、いざという時助けてくれる誰かがいる安心感を心得ている。このように誰かと一つ屋根の下に住むことで、特に行為の共有は見られないが「安心感」や「安全」が得られるという指摘が多かった。

また一言に「安心感」や「安全」と言っても様々なものがあり、多くのホームシェア居住者、特に結果的単身者においては、シェア居住に対して安心や安全を求める何かしらのきっかけがあることが分かった(図9)。

### 4-4. まとめと考察

本研究では、ホームシェアの特性を把握するために、日本でも近年若年単身者の一居住スタイルとなりつつある同世代で行なわれているルームシェアと比較しながら、その生活・居住環境の実態を明らかにした。ホームシェアでは空間の共有はしているのだが、居住者間での主な交流が挨拶と会話であり行為の共有は少ない。また居室面積や設備数の充実に、行為による空間の使い分けよりも、居住者間による空間の使い分けが行なわれ、個人の空間の独立性を維持している傾向にある。プライベート空間の独立性を維持しているのだが、一つ屋根の下で暮らす中で何らかの安心や安全を感じている。

ここに自分専有のプライベート空間である建築的な領域を超えて、認識の領域が存在していることが分かる。中でも事例3では、空間は共有しておらず、独立居住であった。しかし、同じ屋根の下に暮らすことで物理的領域を超えて認識の領域が存在している。同じ独立居住でも、日本のワンルームでは、物理的領域は認識の領域と一致しているため、近隣居住者に無関心な結果に至る(図10)。本研究では、ホームシェアにおいて、一つ屋根を共有した結果、認識の領域が生まれお互いの気配を感じながら生活していることまでは把握できた。そして、ここではこの認識の領域に関する調査までは至らなかったが、その根本に「家族が住んだ」住宅でホームシェアが行なわれていることに関わりがあるのではと推察する。

### 5. ホームシェアの可能性

ホームシェアは環境移行が問題視される高齢者にとってこれまでの生活スタイルを維持しながら在宅で、かつ人との交流が可能な居住形態と言える(図11)。

このように高齢者、及びシングルマザー等の結果的単身者が自らの意思で居住環境を維持していくためにはさまざまなサポートが必要であり、また人との交流は必要である。どのような人的ネットワークをもっているのが、生活状況を大きく左右すると考えられる。非家族でのシェア居住であるホームシェアはこのような結果的単身者の生活のひとつの選択肢となると考えられる。

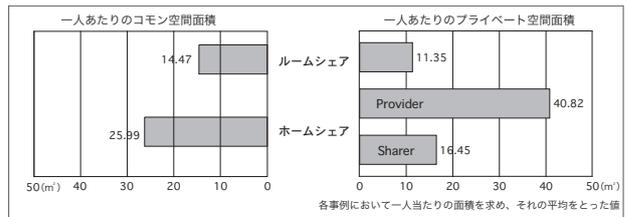


図7 一人あたりの居室面積比較

ルームシェア									ホームシェア								
8	7	6	5	4	3	2	1	事例	8	7	6	5	4	3	2	1	事例
3	2	3	3	2	2	2	3	居住者数	3	2	3	3	2	2	2	3	居住者数
×	—	○	—	—	—	×	—	鍵	○	×	○	×	×	○	○	○	鍵
○	○	○	○	○	○	○	○	玄関	○	○	○	○	○	×	○	○	玄関
○	○	○	○	○	○	○	○	キッチン	○	○	○	○	○	○	×	○	キッチン
○	○	○	○	○	○	○	○	ダイニング	○	○	○	○	○	○	×	○	ダイニング
○	○	○	○	○	○	○	○	冷蔵庫	○	○	○	×	○	×	○	○	冷蔵庫
○	○	○	○	○	○	○	○	バス	○	○	△	△	×	×	×	△	バス
○	○	○	○	○	○	○	○	トイレ	○	○	△	△	×	×	×	△	トイレ
○	×	×	×	×	×	○	×	ベッドルーム	△	×	×	×	×	×	×	×	ベッドルーム

※○は共用、×は専用、△はProviderは専用であるが、Sharer間で共用であることを表す  
鍵についてはプライベート居室の鍵の有無を示す

図8 居室・設備の共用・専用の割合

事例	きっかけ	効果
事例1	・自身が監督をする野球チームの留学生の受け入れ経験 ・だんなさんの世界 ・離別	・異文化や、他人を知る機会 ・地域に対して活気を示す ・一人ではない安心感
事例2	・以前住宅の中でつますいて転んだ過去と再び転ぶ不安	・誰かが居てくれる安心感 ・何かの時に助けてもらえる安心感
事例4	・離婚による孤独感と不安 ・ローンに対する精神的不安	・誰かが家に居る活気による安心感 ・経済的支えへの安心感
事例6	・離婚後、友人シングルマザー親子とのシェア経験、その後一人残されたような孤独感 ・腰をいため家事の負担 ・離婚経験、暗い自宅に帰る寂しさ ・掃除・ゴミ出し全て自分でやらなければならない負担	・面倒が増える煩わしさの反面、人がいる良さ ・話し合いを持ち、家事の分担による負担の軽減 ・電気のついた誰かがいる家に帰宅する安心感 ・家事の分担による負担の軽減
シェアードハウス事例	・シングルマザーとしての不安と責任 ・離婚による孤独感	・不安や子育ての悩みを共有出来る ・交流

図9 「心的効果」のきっかけと効果一覧

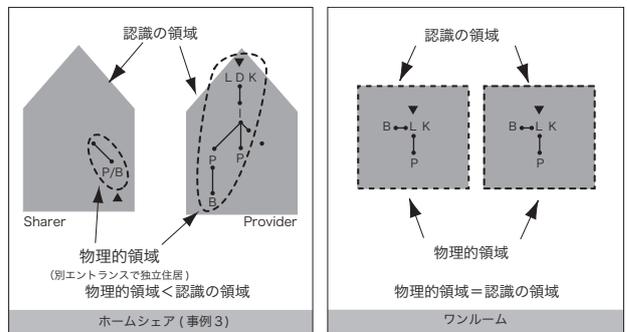


図10 物理的領域と認識の領域の関係

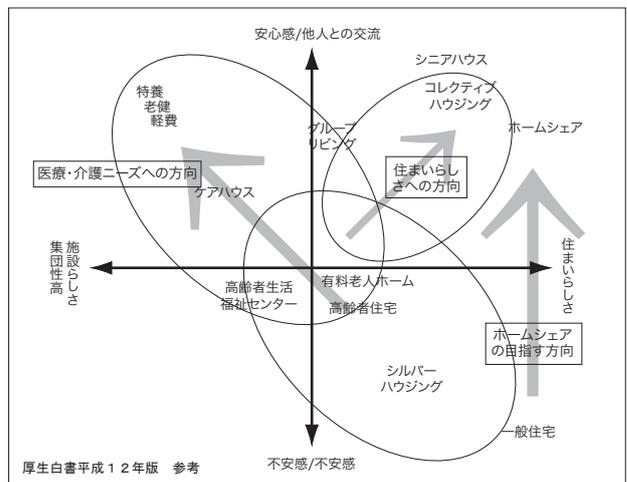


図11 ホームシェアの位置づけ